Question BoxからG５へ
――愛用者のみなさんとともに

原川　博善

◆辞書は愛用者に育てられる

辞書を愛用してくださる方々から寄せられるご質問，提言等によって記述上の思わぬ不備や誤りを是正する機会が与えられ常々感謝しております。

ここではG４についてご指摘をうけた項目で『英語教育』Question Box 欄において回答した中から今回G５に反映したものをいくつか取り上げてご報告します。

◆日本語「の」と関連して

「K大学の学生」は a student at K University のようにふつう前置詞は at で，「の」に引かれて of としないよう各英和辞典で注記しています。しかし，あるライティングのテキストに We are proud of being students of this school. とあるが，この of は正しいかとの質問がありました。

of は次の文のように「所属」を表す場合に適切な前置詞です。

Once you become a student <u>of</u> the University of Ulster, you automatically become a member of the Students' Union.（アルスター大学に入学すると自動的に学生会館の会員となります）――BNC（下線は筆者；以下同じ）

上記の文では at も可能ですが，be proud of being の表現に生徒の学校への帰属感が表れていて of が使われたと考えられます。

これをふまえて，G５では a *student* <u>at</u> Oxford University（オックスフォード大学の学生）のほかに a former *student* <u>of</u> Prof. Brown（ブラウン教授の（下で学んだ）元学生）のような「所属」を表す of の例を挙げることで疑問に応えることができると考えました。

つぎに，「スージーの友だち（のひとり）」は，Susie's friend, a friend of Susie's,「スージーと友だち」は a friend of Susie, friends with Susie のように表せます。特に区別しない場合 a friend of Susie と a friend of Susie's では，後者の二重属格（of Susie's）の方が of 属格（of Susie）より一般的とされます。しかし，of 句が２語以上になると逆に of 属格の頻度が高いという調査結果があります（*Longman Grammar of Spoken and Written English*, pp. 308 and 310）。COCA でも確認しましたが，特に３語以上ではほとんど a friend of defendant Peg Millett のような of 属格表現となっています。

そこでG５では次のような記述となりました。

I am「a *friend* of Susie('s)［friends with Susie］. 私はスージーと仲よしです《◆'s をつけるほうがふつう．a *friend* of Susan Jackson のように of 句が２語（以上）では's をつけない方がふつう》

LGSWE（p.310）は，二重属格は旧情報を，of 属格は新情報を担う傾向にあることを指摘していますが，そこまで詳しくは触れませんでした。

◆動詞 thank が that 節を従えるとき

動詞 thank は目的語に God，goodness，heaven が来る時，that 節をとることがあるよう

だがそのほかの目的語もあるか，という趣旨の質問がありました。

確かに you，him などを目的語にとることもありますが多くの場合 God を指しており，祈り・感謝の表現として使われています。

Lord, we thank you that your word is true.（主よ，み言葉の真なることを感謝いたします）——COCA

このように thank が that 節を伴う型は使用される文脈が限られているため，一般に辞書では that 節を明示していません。

Thank God［goodness, etc.］が，ふつう間投詞として文の前，時に後ろで使われますので，G 5 では語義に加えて次のような例文を付し，that 節については注記しました。

Thank God［goodness, heaven(s), the Lord, Christ］(for O)!《略式》［喜び・安堵を表して］（…とは）ありがたい，ああ助かった，しめた．‖ *Thank God,* you're back. ああよかった，君が帰ってきてくれて《◆ that 節や主語を表すこともある‖ *Thank God*［I *thank God*］that mother is doing well. 母が順調に回復しているのがありがたい》/ *Thank God for* that. それはよかった．

◆語義の拡充

thanks to O は，日本語の「…のおかげで」と同じく，本来の意味とは逆に「…のせいで」を表すことがあります。G 4 では［時に皮肉を込めて］…のおかげで；…のために《◆主節の事柄が起こった経緯を述べる》となっていましたが，G 5 では，否定的語意を明確にするために「…のために」に代えて，「…のせいで」としました。

これと似た例として A, if not B の表現があります。この表現は本来譲歩的な意味で，「たとえ B でなくても A（以上）だ」…(a)と解釈されます。次の例はこれにあたります。

She understood his meaning, if not his words, and took his advice.（彼が言う言葉はともかく，その意味するところを理解して，彼女は助言に従った）—— *COBUILD*[5]

これに加えて現在では「A である，いや B かもしれない」…(b)の意で多く用いられています。

They cost thousands if not millions of pounds to build.（それらを建設するには何千ポンドおそらくは何百万ポンドも費用がかかった）—— *OALD*[8]

米国の *MWALED* は，(a)，(b)両方の語義を認めていますが，英国では *COBUILD*[5] は(a)のみ，*OALD*[8] は第 6 版（2000）以降(b)のみの記載となっています。(a)，(b)のいずれの意味であるかは，文脈や表記された場合のコンマの有無，発話された場合の音調の違いなどとも関係します。

G 5 では(b)の語義を加えて次のようになりました。

(2)［A, if not B で］《◆ A と B は形容詞・副詞・名詞》B でないとしても（少なくとも）A ‖ Jim was very uncomfortable about, *if not* afraid of, seeing her again. ジムはもう一度彼女に会うことを恐がってはいないまでも少なくともとても気まずいと思っていた．

(3)［A, if not B で］（確かに）A いや（もっと）B かもしれない‖ The concept is difficult, *if not* impossible, to understand. その概念を理解するのは難しい，いや不可能かもしれない．

（はらかわ　ひろよし・元平安女学院大学短期大学部教授）